

内的世界の冒険者たち（四）

— 画家、関根正二 —

二十歳と二か月、七千三百余日が画家関根正二に許された生の足跡であった。明治・大正・昭和初期の三十年あまりの間に、多くの「天折の天才」と呼ばれるような画家たちが現れていた。たとえば「海の幸」の青木繁（一八八二—一九一一）、「エロシエン」の肖像の中村彝（一八八七—一九二四）、「麗子」の岸田劉生（一八九一—一九二九）、「バラと少女」の村山槐多（一八九六—一九一九）らがあげられよう。そうした作家たちにおいても、とりわけ関根正二（一八九九—一九一九）は早逝であった。もちろん、画家としての関根正二の時間はさらに凝縮される。画家関根正二の誕生を二科展入選とするならば、画家としての活動はわずか四年に過ぎない。その間、重要文化財に指定される「信仰の悲しみ」（大原美術館、92.0x120.0cm、油彩、一九一八年）をはじめ、多数の作品を描き上げている。

明治三十二年（一八九九年）四月二日、半農屋根葺き職人の父関根政吉と母スイの四男五女の次男として、福島県西白河郡大沼村

菅野孝彦

大字獺目十一番地に生まれた。正二の祖父関根利右衛門は、白河藩三人扶持の下級武士で、戊辰戦争における被弾による負傷がもとで死亡していた。正二が三歳となる明治三五年、東北地方一帯が天明飢饉以来の凶作に見舞われた。当時、関根家には、正二の祖母、伯父夫婦と家族、正二の両親と兄弟姉妹の十三人が、藁葺きの家に同居していた。凶作は明治三八年、三九年と続き、他家と同様であるが、大所帯の関根家は餓死の可能性すらあった。そのため正二の父政吉は、新たな職を求めて東京に出、故郷を離れることを決意する。明治四十年十月出郷し、東京市深川区東町四六番地（現、江東区住吉一丁目六番地）に移り住んでいる。ただ、尋常小学校二年の正二自身は、生家にとどまり祖母や叔父夫婦らと生活することとなった。この時東京へ向かったのは、正二の両親と兄と二人の姉と二人の妹であった。正二も、翌明治四一年九月、東京に移り住む。正二の家族が暮らす深川一帯は、当時はおかつての湿地帯の名残りとなる大小の河川や堀が走る、長雨ともな

ると床上浸水も度々となる地域であった。関根家の家のつくりは、土間・三畳間・六畳間・台所からなっていた。

東京に転居後ほどなくして、関根正二は自らを画家の道へと導くことになる。一歳年上の伊東深水(本名、一)と出会い、遊び友達となった⁽¹⁾。明治四五年、十三歳で関根は東川尋常小学校を優等の成績で卒業し、神田にあった夜間専修学校の錦城予備学校(中学校相当)に進学する。ここでの学業はけつしてかんばしいものではなかった。関根自身、次のように述べている。

k 先生から君は学校に通うより少し、人を離れて空想に耽つて見給へと、云はれて私は不思議に想ふけれど、何の気もなく、神田を歩き廻つて居る中に、やはり幼な友であつた男のsに逢て、色々と話して居る内、彼も芸術に身を投げて居ると聞き、私は興奮の余り芸術に身を投ずる様な氣になつたのです。⁽²⁾

時系列的には、十五歳となつた大正三年春に錦城予備学校を退校し、sと語られる伊東深水と再会し絵画の道を感化され、さらには伊東が勤めている会社を紹介され、伊東が籍をおく図案部に給仕として採用されることができた。深水と関根が籍をおいた東京印刷株式会社図案部には、外国の雑誌や『白樺』や『スバル』が置かれ、当時の美術界の潮流に容易にふれることができる状況

にあった。たとえば、『白樺』ではロダン、ゴッホ、セザンヌ等の図版を掲載し、西欧の後期印象派の芸術家や作品を紹介していた⁽³⁾。さらに、この図案部には関根に影響を与えた多士多彩な人材がみられた。とくに小林専という洋画家には、毎夜のように下宿に出入りするほどに影響を受け、オスカー・ワイルドやフリードリヒ・ニーチェを知ることとなつた。その影響なのか、両手に林檎を握つてかじりながら往来を闊歩したり、低劣な人間の顔が見たくないなどと云つて空を仰ぎながら歩いて自転車にぶつかったり、白昼往来で見ず知らずの女性の頬に接吻を試みたり、とさまざまな奇行を行つたと言われている⁽⁴⁾。

関根正二の画家としての足跡は大正四年の二科展入選に始まるが、彼にとつて大きな転機となる出来事が、その前に起こつている。それも小林専の感化の一端といえるかもしれない。関根は、小林専の下宿で知り合つた野田九甫の弟子という野村某という日本画家と意気投合し、誘われるままに二月甲信越方面の旅に出ている。その旅程は、小田原・御殿場・静岡・身延・甲府・松本・飛騨高山・船津・富山と同行の旅は続き、富山からは野村と別れ、関根一人となつて、直江津・高田・長野と向かつている。この間、一日一食もままならず、門付のように描いたスケッチを売るなどしていたようである。こうした有様は、以下のようにも語られている。

山中で野犬に襲われたり、降り止まぬ雪を避けて洞窟ですぐす夜の寂寥は、たとえようもなく辛かった。……すでに木々の小枝などで鉤裂きになった着物は、その体をなしていない。なによりはましか、と捨てられた莫産で軀を包み、ようやく辿り着いた山麓の農家の木小屋でまどろんだのも束の間、屈強な農夫に発見され、追い出された。(5)

長野の巡査夫妻の温情を受け、こうした行き倒れ同様の状況を脱することができ、肉体的にも精神的にも回復することができた。また、長野では東京で聞いていた高橋由一⁽⁶⁾に学んでいた川野次郎のもとを訪ねている。そのとき川野次郎自身は写真館を経営する身であったが、開根より四歳年上である息子⁽⁷⁾の通勢が大正三年の第一回二科展に入選していた。その川野通勢の絵や通勢が所蔵していたダ・ヴィンチやデューラー等の画集に、大きな衝撃を受けている。七月上旬に帰京するが、この体験は画家開根正二の根幹となったことは、大正四年七月四日の日記に認めた言葉からも明らかであろう。

神は目を開かせた、力を認めた、表現に努力せよ

伊東深水も、五か月あまりのこの体験が開根正二の転機となったと「その間幾多の悲喜劇を演ぜられたことは云ふまでもないが、

世間見ずであった開根君が、人生の機微を深く体験したり、大自らの力の衝動を受けたのもこの時だ」⁽⁷⁾と述べている。その結実が、第二回二科展に初入選⁽⁸⁾した「死を思ふ日」である。

「死を思ふ日」では、四本の樹木と風にざわめく羊歯の群生、背をかがめて強風に逆らって歩く一人の男。これらが黒みがかつた濃緑色で描かれている。この絵を評し、匠秀夫は「風のうなりが死をささやくのだろうか。十六歳の少年にとって、死は身近なものであったのだろうか。死を思ふ日」それは、生の烈風の中に身をさらさねばならなかった貧しい少年の感傷であったのだろうか。いずれにしても、この四年後に死をむかえた開根正二を知っている私たちにとっては、この作品の題名は、この画家の出発を飾るにふさわしかった、と思われてくる。開根は出発の当初から自己の悲劇的運命を予感していたのだ」と語る⁽⁹⁾。開根の絵画が、けつして自然の描写につくものではなく、彼の内面とつねに運動するものとなる。開根は、自分の絵画を思想芸術と位置づけている。「精神に思想の発動が、私の考へる思想芸術で、それを形の上に現したのが、絵画、文学、音楽であると信ずる」

(10)

俺れは実に空虚な人間だ。自ら道を斬り開くことが出来ず、神を信じ、信仰の念を増す事なし。神の实在を認めんと、努力をすれど、俺れはなぜ人の模倣をするのだろうか。人間と云

ふ卑な者の清い俺の父、弱者なる俺を主の側につれ行き給え、俺の頭は煩悶に煩悶を重ねて居る。人間を仲宿に、神を表現せんと努力すれど、神は俺を罪有る者と俗界に放逐せり。(11)

だが、彼にとつて神の存在は超越的実在といったものではなく、淋しくなつて手を合わせて拝みたくなくなるような、身近な存在である⁽¹²⁾。「死を思ふ日」の入選にもかかわらず、現実の世界は、生活苦というかたちで逃れられない物質的苦しみを与える。「人間の喜び、心からの喜び、私は今日真の喜びを得たのだ。其れは私に取つて、忘れ難い金だ、私は三四月此の方手にしたことのない金十銭ちかひと金だ。私は此の十銭の金を懐にしつかつとをさいて電車に乗った。……此の時の心は実に捨て難い。私の現在の本能だ。金のとうとさ、金の力、現在の私には金は一番の有難い様に見える。金が無くても生きて居られよう、私は自分の生活、境遇総て金が無くても、一時も居られぬ。」⁽¹³⁾

二科展入選という名声を得ても、現実の生活苦から、片ときも離れることができないままでいる。しかし、関根正二は、目前の運命を忌避することなく時を食み続ける。彼はまさしく「我等人間に一番吾にとつて惜しまざるを得ない時、人はこの時を無に費やす。吾れの生活と時、運命此れを目前に生きる」⁽¹⁴⁾のであった。「實在の力、私には見る物、総て限らない實在の力を心強く感ずる。頭がいらいする程感ずる。真の力を得やうとするには技巧

を捨てなくては駄目だ」と、いまここにあるもの・實在するものこそ、彼の立脚点にはかならない⁽¹⁵⁾。この立脚点が、関根芸術の根幹となる。「芸術は神の力を、實在を實現し表現した物だ。其れは人間一人の性質を通した自然感情其れが、もつとも、真実で有りうべき物が真なる芸術だ。……神に絶服する人間は最も真実だ。人間は実に弱い者だ。」⁽¹⁶⁾もちろん、関根にとつて現実世界は手放しで受け入れることのできるものではない。関根の自覚する人間は、「現在に立脚し、恐怖を感じない人間⁽¹⁷⁾ではない、むしろ現実において逡巡する不安を内蔵する姿である。彼にとつて、人生が安穩の場でないことは明白である。「人生は悲劇だ。戦闘だ。生物の行手は青白い墳墓がまつ。強者たる者が総てで第一義だ。」⁽¹⁸⁾

二科展に初入選した後十二月十一日づけの村岡黒影宛書簡で、ゴッホ書簡集について語っている。

ゴッホの手紙文を今読み上げた所です。やはりゴッホは何に人と云つても、彼の真似は出来ませんね。私から思ふと彼程現代に総てを徹底したものはないでせう。彼はミレーに激烈感服して居ますね。彼も一個の宗教家であり、芸術家だ。併しキリスト、シャカの如き生ける肉体の上に仕事はしなかった。換言すれば、この驚くべき芸術家キリスト、シャカは粗末な此等の道具文明人の神経の破壊された

やうな、複雑な靈魂を棄てて像も彩らず、画も描かず、文筆もとらずして彼自身に厳然と云ふ如く、直ちに生ける人間、不滅の人間を造つたのだ。そこには少し違ふが吾等の欲する所は寧ろこの生ける人間を造りたい物だ。ドラクロアにせよ、ルーベンスにしろ、キリストの形や姿を描きたるに過ぎない。ジョットにせよそれだ。併し只一人ミレー、ゴッホは其の教へを描いた。そして他の多くの宗教家総ては自分に憫笑させるばかりで有るのです。……実際の哲學者、宗教家の中で、教への本源が不滅であり永遠であつて、その上、そこに真理と謙譲の偉大な實在の価値を厳然と示したのはキリストで有ると思ふ。(19)

キリストやシヤカが内に秘めていた教えを描くことを、関根が試みようとしていたことがみてとれよう。さしずめ、関根の姿は「如何なる立場から言う主張でもなく、わが身を守る知識や贅沢を奪われ、ただ眼前に与えられたものにしか生きる糧のない事を、つねに感じている人」にほかならないであろう⁽²⁰⁾。

大正五年の第三回二科展で油彩「習作」水彩「女」ペン画「街道」の三点が入選したのに続き、大正六年の第四回二科展では油彩「長野近郊」で入選をはたしている。大正四年の初入選から数えると、関根は、最後の出展となる翌年の第五回まで連続入選を続けることになる。しかし、この連続入選の間にも関根の絵画は

変貌を遂げていく。初入選となつた「死を思ふ日」に大きな影響を与えた川野通勢に対し、自らの相違を語っている。

今日は三年前の河野と大分違ふ。……實際だまじめな努力に何物を(も)打ち勝つ者はいない。河野の今の絵は、ひとよりはよいと思ふ。しかし気分のない、情緒ない、熱はあつても血のとぼしい、経験のない白樺の人たちの様だ。真面目さはある、そして努力もある、併し現実生活の苦しみ悲しみを知らない、内からの炎はあつても火勢風がないため周囲を燃やす事が出来ない、技巧もある、實際河野の技巧は驚くべきだ。

(21)

関根正二が求める絵の骨格が見えてくるかのようである。関根自身、自らの批評眼に耐えうるかは疑問であるが、めざすべき地平はそこに広がるのである。《現実生活の苦しみ悲しみを知り、周囲を燃やすような絵画》、それこそが関根のめざす地平といえよう。だが、めざすべき地平がこうであるとしても、二科会への批判において関根の絵もやり玉にあげられてしまふ。

第四回二科展 出品の中には少なくとも二科的色彩を高調せしむる為に選択の標準が偏頗になつて居りはしまいかとの疑すら抱かせしめるものがある。所謂文展の中にある少数の作品にみ

る如きアカデミックスを排斥するが為に、新しいアカデミックス——更に詞を砕いて云へば僅か一年か二年一寸油絵具を取り扱って見たと云ふやうな、吾々から考へて何等の組織的な教養を受けない、ほんの駆け出しの素人のやうな絵も含んでいると云うことが其事を証明して居るのである。……世間俗衆からは二科会は新しい芸術の急先鋒であるかの如く考へられて居る。……然し一般から募集して其を会員の鑑別に因つて展列せられた作品を見ると「外部に対して旗幟の鮮明を期する事の為に」と云ふやうな觀念が半ば無意識に半ば意識的に会員の脳裡に流れて居つたのでないかを感じしめる。……然し其は真に二科会存在の理由に向かつて又二科会存在の第一義として悦ばしい現象であらうか、何故と云ふ其等の多くは自然に敬虔と愛著の觀念が希薄で、徒らに外面的な色彩や、写形や、手法を氣取つて居るからである。例へば物をソリッドに見る事が殊更に高調されて其為に、自然に見える温情や柔味を失つて唯ゴツゴツとした堅いものになりたり、又肉眼に映ずる愉快を晴れやかな色彩をも殊更に陰鬱な汚らしい色を塗りつけたりして表はすことが一種の流行性を帯びて見える位少なくない。例へば関根正二氏の『長野近郊』宇治田芳夫氏の『材料』森山収二氏の『山畑』などは其著しいものである。之等諸作の中に芸術上の眞実な力を見出す事は出来ない⁽²²⁾。

まさに関根正二がめざすべき絵画の地平とは眞逆の視点が、こ

こには提示されているといえよう。(現実生活の苦しみ悲しみを知り、周囲を燃やすやうな絵画)をめざす関根の視点は、何ら理解されていないのである。とはいへ、関根においてもめざすべき絵画の地平であるとしても茫漠としていた視点が像を結ぶのが、第五回二科展に出品され樗牛賞を獲得した「信仰の悲しみ」である。この作品の制作について、関根は次のように述べている。

私は先日来極度の神経衰弱になりそれは狂人とまで云はれる様な物でした。併し私は決して狂人でないのです。眞実色々な暗示又幻影が目前に現れるのです。朝夕孤独の淋さに何物かに祀る心地になる時 あした女が三人又五人私の目の前に現れるのです それが今尚ほ目前に現れるのです あれは未だ完全に表現出来ないのです 身の都合で中止したのです。⁽²³⁾

この「信仰の悲しみ」について、二科会発足の発起人の一人である有馬生馬は、次のように評している。

第一室関根正二氏の「姉弟」「信仰の悲しみ」「自画像」の三点に対し樗牛賞が与えられている。……私は元來技巧上の巧拙というきわめて軽くみている方の一人である。技巧ということにももちろんいろいろの解釈があるが、ごく卑

近な解釈というと、関根氏の作品は私のようなものの眼にもいたって蕪雑な感⁽²⁴⁾は免れない。しかしあの三点の作品から受ける印象はきわめて精神的である。……この点をよく注意して見ていただきたいと思う。作家の燃えるような主観の動揺が人間の普通持つている物質的感覚、写実的実在感の脇をいつのまにか通り過ぎて、指頭さえそれに触れずに終わっている。この点が非常に精神的な感を与え、比較的長い間観者の記憶に作品の幻影を再三髣髴せしめるゆえんである。しかし視覚にもっと正確と敏感をもった人にはこれで満足を与えられないのはやむをえまいと思われる。関根氏の芸術は精神的であるが、文学的あるいは空想的、もっと悪くいえば空虚な比喩的、いわゆる理想画なる部類のものには堕していない。その精神的威力はどこまでも絵画的の根底を失っていない。青空の下、金色の野原を歩む五人の女の黄、淡紅。……彼女らが性の魔力において全く無感覚なことは、女であることを容易に忘却せしめる。関根氏の芸術は忘却せしめる芸術である。多くのすべての実在を忘却せしめる力を持っている。かくて観者に残されるものは絵画上の幻影のみである。その表現するものは物語でも、比喩でもない。そうしてその絵画上の幻影は感覚的でなく、より精神的な効果を持っていると、私は判断するのである⁽²⁴⁾。

関根正二がめざした〈現実生活の苦しみ悲しみを知り、周囲を燃やすような絵画〉は、有馬生馬の言にみられるようにその緒についたといえるであろう⁽²⁵⁾。関根の言葉を借りるならば、現実の生活において直面する数々の悲哀に絵画の世界が結ばれる。関根にとつての悲哀の聖地への巡礼が始まるのである。

世に悲哀に比らぶべき真理はない。否時としては、悲哀のみ唯一の真理と思はるる事さい有る。他のものは、眼いや食欲の幻象であつて、時に人を盲にし、乃至、人を満腹せしめる事はあるが、此の世は悲哀から造られた物で小児一人生るも、星一つ出るにもそこに苦痛の伴ふ事を忘れてはなりません。ひたすらに、悲哀には深刻な驚くべき現実性が有るといひ、更に悲哀有る所に聖地が有る、そこで極力悲哀を力説した。人間普通人は、或る程度迄で、外の何物をも理解しない、其れは理解しないのだ。自分は実に真の力、其れは私の信仰によつて得るのである。⁽²⁶⁾

われわれの背負う悲哀の数々は、けつして拭い去れるものではない。むしろ、悲哀の底に沈潜し、われわれは一步一步と歩を進めるのである。直面した悲哀を否定しようとするのではなく、自ら食み、直視し、そこに立つことにより、自らの糧となる。その地

は、われわれの内的世界にほかならない。そこにおいて反芻される中であたかも一個のきらめく鉱石のような方法が見出されるのである。関根正二は、「生命の鉱夫」⁽²⁷⁾として、一人の内的世界の苦力として命の刻印を印したのである。

注

(1) 伊東深水（一八九八―一九七二）は、父親が事業に失敗したこともあり、すでに十歳の年から東京印刷株式会社深川分工場で活字工として職に就いていた。十三歳の時、伊東は東京印刷本社の図案部研究生になるとともに日本画家鍋本清方のもとに入門した。十六歳で、再興した日本美術院第一回展に入選し、早くに日本画家として頭角を現し美人画の泰斗となった。

(2) 酒井忠康編『関根正二 遺稿・追想』中央公論美術出版、平成三年、一一五頁。

(3) 関河惇『関根正二の肖像』門土社、平成九年、一一頁参照。

(4) 伊東深水「関根正二君の追憶」『関根正二 遺稿・追想』一九三頁。さらに、伊東深水は関根における小林専体験について次のように語っている。「そのうち図案部へ小林専といふ天才肌の洋画家が入って来た。ニイチエやオスカ―ワイルドの信者であった。単純で、自我の弱い、生一本な関根君は、直ちに小林氏の思想の踏襲者になってしまった、……関根君の生活にエゴისტックな心持が盛り込まれたのも、放漫なデカタンの気分になって酒

の味を知り初めたのも、これ等の事柄が与へた結果と見る事が出来る、実際、君程単純でお人よしで素直な男はなかった、君は認識力や創造力に欠けてはいたが、一種のインスピレーションとも云ふべき靈感がものを見る刹那、無意識的に働いていた。そして鈍重なうちに、或る力強いものが常に宿っていた事は事実だ、君は何でも考察せずして鵜呑みにしていた、然しそのうちの貴いもののみを知らず知らずのうちに吸収していたのだ、君の目に触れるもの、君の聴覚に入るものそれ等の総ては君の肉にある不思議な力を育てつつあるのだ、おそらくそれは君自身も知らないことだったろう。」

(5) 関河惇、前掲書、二四頁。

(6) 高橋由一（一八二八―一八九四年）は、「花魁」（東京芸術大学、77.0x54.8cm、油彩、一八七二年）と「蛙」（東京芸術大学、140.0x46.5cm、油彩、一八七七年頃）の二作品が重要文化財の指定を受けている。

(7) 『関根正二 遺稿・追想』一九四頁。

(8) 第二回二科展には、一七三名四九三点が搬入され入選は四三名七九点であった。

(9) 関河惇、前掲書、三二頁。

(10) 一一五頁。

(11) 『関根正二 遺稿・追想』十一頁。

(12) 同上書、一四七頁。「今日が始めて労働になった、弁当飯に、一

杯の茶、俺れは弁当のふたをあげてしみじみ。絵を感じた、泣き
ないようで恐ろしい、この心持ちは労働をせん人には味ははれな
い」といった内面の世界が関根においては指摘される。彼の精神
性の場は、けつして超越的領域ではなく日常的世界のそこかしこ
にほかならない。同上書、十四頁以下。

同上書、二五頁。

同上書、二十頁。

同上書、二七頁。

同上書、三一頁。

同上書、三八頁。「人間信仰を持って、世に立てば、其れは何に
物にも忘れる事なく自己自身の独歩を見い出さん。……現在に立
脚し、恐怖を感じない人間は幸福なり。」と関根は語るが、彼の
日々を知れば知るほど逆説的に響いてくる。

同上書、三九頁。

同上書、百十頁以降。「人生は、こうして過ぎて行く。時は再び
還らない。ところが、僕は飽くまで仕事に没頭している、仕事の
機会が再び来ないと承知している、まさにその理由によつてだ。
とくに僕の場合では、もつと烈しい発作が、やがては、恐らく絵
を描く僕の力を、永遠に破壊してしまうであろう、そういう次第
であつてみればね。」(『小林秀雄全集 第十卷』新潮社、二〇〇二
年、三八七頁。)ゴッホのこうした言葉を紐解くとき、関根正二
の絵画制作もあたかも過ぎゆく時との競争と思えてならない。

同上書、三三三頁。

同上書、七七頁以降。

同上書、九五頁以降。

同上書、一三九頁。

同上書、一四七頁以降。

しかしながら、関根の金銭的充足はまだなされることはなかった。
単に、量的な獲得を意味しない彼の考え方をみるのが出来よう。
「時は過ぎる。秋もいつか寒さが益し全てが冬になって、夜の空
には清い月が出て居る。自分の心も清い。自分は一ヶ月前から、
百二十円手に入った。五十円の自画像が四十円で買はれた。八十
円で目黒の村上氏に信仰の悲しみを買はれた。金はいくらあつて
も、自分はなんとも感じない。又金があつても自分はなにも出来
ない。」同上書、一〇四頁。金銭的対価と精神的充実が問われる
のである。

同上書、二六頁以降。関根正二に対する適確な理解として、酒井
忠康の言葉をあげることが出来よう。「西欧と日本(ないしアジ
アも含めて)の近代美術の歩みを見渡すと、そこに大きなテーマ
が横たわつていたことに気づく、それは「生の悩み」と「病」で
ある。近代における芸術には、この二つの問題が色濃く反映して
いる。生に思い悩む、あるいは病に囚われた画家たちの、その魂
の行方と目覚めた意識の集積こそが、もしかしたら日本の近代洋
画の特徴的な一面だったのでないかというのが、わたしの意見

(27)

である。……もう一度、彼が主観の世界を、つまり心の中のイメージを描くようになった時に、あの個性的な世界が登場することとなった。彼が本質的に心を描く画家であったことを『死を思う日』という作品は物語っている。」酒井忠康編・監修『関根正二画文集・雲の中を歩く男』求龍堂、二〇〇〇年、十三頁以降。

『近代の芸術』第五十号、至文堂、昭和五四年、十七頁。

（かんの・たかひこ 東海大学文学部教授）